

# 日本語

## ヴォークルーズ・ハウス (VAUCLUSE HOUSE)

WENTWORTH AVENUE  
VAUCLUSE  
NSW 2030  
AUSTRALIA  
www.hht.net.au

電話 02 9356 3022  
ファックス 02 9357 7176  
インフォライン 02 8239 2442  
info@hht.net.au  
テレックス 02 8239 2377

他の歴史的建造物: エリザベス・ベイ・ハウス (ELIZABETH BAY HOUSE) | エリザベス・ファーム (ELIZABETH FARM) | 旧総督部 (GOVERNMENT HOUSE) | ハイド・パーク・バラックス博物館 (HYDE PARK BARRACKS MUSEUM) | 犯罪博物館 (JUSTICE & POLICE MUSEUM) | メルーガル (MEROOGAL) | 旧総督部内シドニー博物館 (MUSEUM OF SYDNEY ON THE SITE OF FIRST GOVERNMENT HOUSE) | ローズ・シードラー・ハウス (ROSE SEIDLER HOUSE) | ラウス・ヒル・エステート (ROUSE HILL ESTATE) | スザンナブレス博物館 (SUSANNAH PLACE MUSEUM) | 造幣局とキャロライン・シンプソン図書館・調査コレクション (THE MINT AND CAROLINE SIMPSON LIBRARY & RESEARCH COLLECTION) | ヴォークルーズ・ハウス (VAUCLUSE HOUSE)



HISTORIC HOUSES TRUST



### 概史

ヴォークルーズ・ハウス(Vaucluse House)の始まりは、アイルランド人の騎士、ヘンリー・ジェームズ・ヘインズ(Henry Brown Hayes)卿のために1803年に建てられた小さな石造りの小屋でした。1827年には、この地所は、ウィリアム・チャールズ・ウェントワース(William Charles Wentworth、1790-1872)が購入しました。ウェントワースは、才能はありますが落ち着いたのない弁護士で政治家でしたが、もっとも影響力のあるオーストラリア生まれの植民地開拓者の一人でした。彼の業績には、最初のヨーロッパ人が1813年にシドニー西部のブルーマウンテンズ(Blue Mountains)を超えたこと、1824年に行った市民権運動(裁判による審判等)、植民者の最初の独立新聞である「ジ・オーストラリアン」(The Australian)の共同刊行、1852年のオーストラリア初の大学(シドニー大学)創立、1856年の代表議会政府樹立のための運動があります。

彼の妻サラ(Sarah、1805年~1880年コックス生まれ)は、前科者の娘でしたが、1829年に結婚するまで婦人用帽子店で働いていました。彼女の綴った手紙を見ると、ヴォークルーズの地所と家を熱心に管理していたことがうかがえます。

ウェントワースは、ニュー・サウス・ウェールズの議会のために代々受け継いできた上流階級の家を提供した人物ですが、古くさかのぼる事のできる自分の家系を示すために、シドニーにある復興ゴシック様式の総督邸(Government House)の中に家族用の邸宅を建てることを夢見ていました。しかしそれにもかかわらず、サラは結婚前に2人の子供をもうけた事で社会的に孤立状態にありました。

ウェントワース氏が植民地の政治について「特権階級の人々」を攻撃したので、植民地の名家の人々と相反目することになってしまいました。これに加え、彼自身が違法な家族の出であったこと、つまり母が受刑者であったこと母、父が路上窃盗罪を犯したことで刑務所行き寸前であったことが、世間に知れてしまいました。ヴォークルーズ・ハウスは、長年にわたって植民地社会の外で社会に溶け込むことを強いられてきたこと、しかも家族がさらに増えていった一家のために建設したことが原因で、内部の配置については定まっていなかったのです。

ヴォークルーズ・ハウスは、1911年州政府によって買い上げられ、シドニー港の前浜に一般の人も行かれるようになりました。1912年までには、1階が一般公開されるようになりました。隣接するティールームは、1920年代に建てられましたが、ちょうどヴォークルーズ・ハウスが、観光地として人気が出てきた時でした。元々208ヘクタール(515エーカー)あった土地ですが今日残っているのは9ヘクタール(23エーカー)あまりで、ヴォークルーズ・ハウスは、馬小屋、馬車道、遊園地、菜園、サービス・ヤードなどを備えた今でも原型を保つ家屋の一つで、オーストラリアで最も重要な場所となっています。修復を行った砂利敷きの小道、鉄製のフェンス、植栽などが屋内の内装を補っています。またこの家の内部は、ウェントワース家の人々が1827年から1861年まで居住していたことを、思い起こさせる調度品が据え付けられています。

ヴォークルーズ・ハウスは、歴史的遺産なので、床の表面、階段、照明を低くおとすなどの注意が必要な場所です。家の唯一の出口は、入り口の部分にあります。上階からの出口は主な階段を通っていったところですよ。

### 1階

- 1 キッチン** キッチンには、大きい2階建ての使用人用の建物内にあり、1829年に建てられたものです。ほとんどの植民地の家と同じく、使用人用の建物は、火事が起きた時の危険性を回避するため母屋から離れた場所にあります。ここでは、料理人とスタッフが家族、お客様、使用人全員の食事を作っていました。戸棚、食物貯蔵庫、鉄製の調理用レンジは、すべて当初のものです。
- 2 食器洗い場** 食器洗い場は、食器を洗うための場所でした。汚い水は、汚水排水溝から流れるようになっていました。
- 3 乳製品製造所と肉貯蔵室** 乳製品製造所(ミルク、バター、チーズを作る場所)と肉貯蔵室(食物貯蔵室)を見ると、自給自足の植民地の地所ヴォークルーズの作業を思い起こさせます。
- 4 貯蔵室** 2部屋続きの貯蔵室は、食物とワインの冷蔵貯蔵室に使われていました。内側の部屋には、瓶入りのワインを置く弓形になったレンガ造りの貯蔵所があります。また塩漬けの肉類をつるすための道具が当初のラス製や漆喰の天井に今も残っています。
- 5 家政婦室** 家政婦の部屋は、家事の中心となる場所がありました。家政婦は、リネン類の管理や他の女性の家事担当の使用人を管理する責任がありました。

- 6 配膳室** 配膳室は、家事担当のスタッフの長の部屋として、屋敷の中の活動や地所に到着したお客様に目が行き届くように、特に家の中心部に設けてありました。ここはランプの掃除、オイルの充填、ランプの芯のカットを行ったり、陶器やガラス製品類、銀食器を磨いて収納しておく部屋でした。
- 7 家族の歴史の部屋** 1900年当時、この部屋は図書館として使われていました。今日では、ウェントワース家の歴史展示室となっています。
- 8 朝食室** 朝食室は、1837年から1840年まで家の一部になっていました。ほとんどの大型の植民地の家には、非公式な家族だけが使う第二のダイニングルームがありました。リヨンのコティエ & Co.(Lyon, Cottier & Co.)による装飾的な壁画のデザインは、1880年代にさかのぼることができます。その一方、彫刻が施された樅製の調度品はフィッツウィリアム・ウェントワース(Fitzwilliam Wentworth)が1872年英国で購入したものです。
- 9 ダイニングルーム** ダイニングルームには、19世紀初期の慣習として家族の肖像がかかっていました。樅製の調度品は、ウェントワース家の所有になっていました。素晴らしい復興ゴシック様式のサイドボードや食器戸棚は1845年にさかのぼることができます。またダイニング・テーブルと椅子(エンボス加工を施したスペイン製の皮製の室内装飾品)は、1859年にヨーロッパから送られ

てここに運び込んだ家具の一部です。19世紀中期のイタリア製のつやだしスタイル製の床は珍しいもので、おそらくオーストラリアの気候を考慮して導入したものであったのでしょう。炉棚は、ニュー・サウス・ウェールズ州南部のマルーランの大理石でできています。

**10 小型のティールーム** 小型のティールームの建具類を見ると、これがウェントワース家が1828年以降最初に増築した部屋だということがわかります。また調度品を見ると、この部屋が小さな略式の居間として使用していたことがわかります。冬になると、部屋の面積が小さいためにすぐに温まることができました。

**11 応接室** 応接室の一部は、ヘンリー・ブラウン・ヘインズ(Henry Browne Hayes)卿のオリジナルの石造りの小屋の壁の内側に作られ、1847年に完成しました。花模様のボーダー壁紙、漆喰のコーニス、イタリア製の大理石の暖炉囲いと鉄製製の格子はすべてオリジナルのものです。この居間は、ウェントワース家の娘たちに、将来の伴侶が会いにくる時のための部屋として考えられていました。その背景には、サラ・ウェントワースが社会的に孤立状態にあったことがあります。1853年にウェントワース家はヨーロッパに向けて出発しましたが、それまでに元来家の中にあつた物は売却されてしまいました。部屋には深紅色のダマスク織りの室内装飾品やブラジル製の紫檀製の家具がありました。現在では、この部屋にはウェントワース家の人々がイタリアで購入したオールドマスターの絵画の模写が飾られています。その中には、ティツィアーノ(Titian)の「女神フローラ」(Flora)、グイド・レーニ(Guido Reni)の「悔い改めたマグダレーナ」(Penitent Magdalene)やムリーリョ(Murillo)の「聖母子」(Madonna and Child)の模写があります。

## 2階

**12 セカンドルーム** 1853年当時セカンドルームと呼ばれていたその部屋は、プライベートな家族用の居間でした。この暖炉と格子は、オリジナルのもので、家具は、屋敷の1853年の目録に基づいて入手されました。

**13 主寝室** 1853年、主寝室には翼型になった衣装戸棚、ドロワーチェスト、大理石製の洗面台がついていました。4本の支柱付のベッドには、1860頃の他の復興ゴシック様式のダーリング・ポイント(Darling Point)にある邸宅「グリーンオクス(Greenoaks)」に使われている光沢のあるインド更紗の複製がかけられています。ベッドは、(上から下まで)藁やホースヘア、羽根の詰まったマットレスを3枚重ねた典型的な配置のものです。

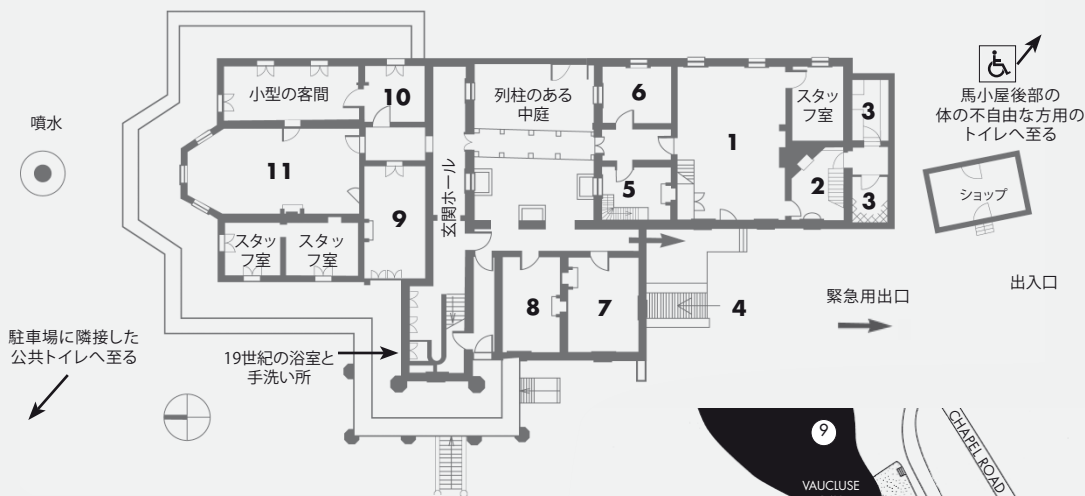
**14 ホール内のフィッツウィリアムの部屋** ヴォークルーズ・ハウスは、1840年代前半には、未完成のままでした。大きく広々とした上階のホールは、ウェントワース家の次男であるフィッツウィリアムの寝室となるように茶棚で区切られていました。

## 3階

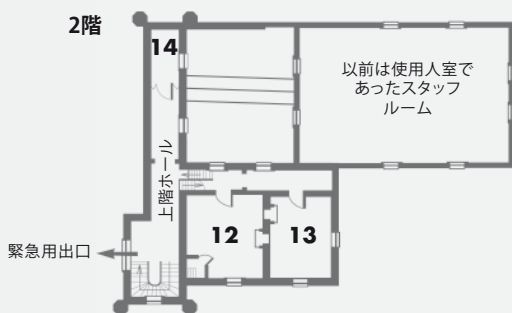
**15 子供部屋** 育児室は、1853年当時5歳から12歳までのウェントワース家の4人の子供たちが使っていたものと思われる。部屋は、子供用の家具やおもちゃのある19世紀中期の典型的な子供部屋らしい装飾がしてあります。金属製のベッドにはガーゼ製の蚊帳が吊ってあります。

**16 ミス・ウェントワースの部屋** ミス・ウェントワースの部屋は、ウェントワース家の未婚の長女にちなんで名づけられました。1853年当時、この部屋はサラ・エレノア(Sarah Eleanor)とイライザ・ソフィア・ウェントワース(Eliza Sophia Wentworth)が相部屋として使っていました。

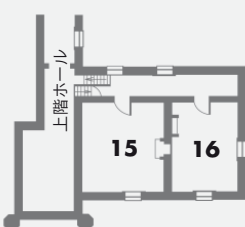
## 1階



## 2階



## 3階



- 1 家屋と入り口
- 2 馬小屋
- 3 キッチン・ガーデン
- 4 洗濯場
- 5 遊園地
- 6 駐車場とトイレ
- 7 進入路と馬車用回路
- 8 浜辺の小屋
- 9 霊廟
- 10 南入り口
- 11 バス停
- 12 体の不自由な方のための駐車場
- 13 体の不自由な方のための入り口
- 14 体の不自由な方のためのトイレ
- 15 ティールーム